

(謄寫版菊版 一一〇頁、非賣品)(寺尾)

●薩道先生景仰錄 文學博士 新村 出著

今は亡きサー・アーネスト・サトー氏に捧げられた追想であつて、吉利支丹研究史回顧のサブタイトルを持つ。

著者の得意さる書誌學的考察の中にも先人に對する敬愛の情がひらめいて情趣豊かなものとし、自ら人を引き入れる美しさを持つ。切利支丹文化の恩人への追悼にこよなき捧げ物云ひうるであらう。(四六版 五七頁、一・五〇 ぐろりあ、そさえて發行〔藤〕)

●明治十五年朝鮮事變と花房公使

武田 勝藏著

此著書は明治十五年朝鮮事變に遭遇せる武田尙氏を父としたる著者が花房家より委囑せられて花房義質公使十三回忌に當り成りたるもの、従つて花房家の覺書、關係史料を縦覽し、本事變遭難者の實歴談を聴取したるが故にその遭難の狀況、交渉に至つても、詳細に平明に論述せられた。附録として遭難者の中田敬義、久水三郎氏等の回顧小録を掲ぐ。

蓋し、明治年間の諸事件が早くも忘れられんことを時

明治外交史上重要な地位を占める朝鮮關係に今この好著を得たるを悦ぶが、其執筆の性質上、花房公使を中心となし、廣き展望—江華島事件、十五年、十七年の事變の關係推移、朝鮮國內の事情等を望み得ざるは止むを得ざる所か(四六版 圖版八、本文一〇三頁、非賣品)(寺尾)

●佐藤信淵に關する基礎的研究

羽仁 五郎著

「何人も變革を期待し、しかもあらゆる變革的運動と思想とが極致の彈壓のみに一時的に屈服せしめられて居るいま、かの明治維新前期の民衆の意圖を代表した思想家の徹底的な理論と計畫と力とを日本國民の前に再び引出して來て見せることは、時宜に適して居る」といふ冒頭の一句は著者が本書に於て企圖したところ即ちその目的従つて又方法を殘るどころなく語つて居る。第一章傳記的敘述、第二章文獻批判、第三章歴史的理理解、その順序に従つて少しく内容を紹介するならば先づ信淵の生涯を叙して一面その時代と環境に及び次に彼が數多き著述

の構成を批判して所謂佐藤家學の傳統を否認しそは要するに信淵の觀念的製作に過ぎずといひ又彼が自ら稱してその獨創に出づるこいふ思想と理論も多くは他にその所據を求め得べくこの見地よりすれば彼は畢竟單なる編纂者にすぎずと評すべきもこの編纂はその本質に於て偉大なる綜合を意味しかくして成立せる經濟學體系は彼獨特の組織なりとしたり。而して彼の思想開展の地盤とされる體験は同時代に於いて飢饉及び生兒陰殺に顯れた國民經濟的不安がそれであり、その救済に對する要求が遂に彼をして最後に國家資本主義的理論を歸結せしむるに至つたことるのである。著者はさきに「轉形期の歴史學」を著して唯物史觀を提唱し「現代歴史哲學の基礎」を與へたこと稱する少壯新進の學徒であり本書は正にかの理論に對する實證的方面を示すものであらうか。一讀してその態度の鮮明を感ずるが人物又は思想をその時代と環境との中に見る方法は我々が過去に於てもなほこれを見たところではなからうか。只我々が感謝するは近來經濟學の立場より歴史を見る者が往々にしてあまりに概念的な歴史の

理解を試みるに對し著者が慎重なる歴史家の態度に於て問題を取扱はれた點である。さればその歴史的理解は概ね妥當ではあるが、聊か冗長である。(菊判二〇九頁、價二・〇〇、東京岩波書店發行)(肥後)

● 談山神社文書 談山神社刊書奉贊會

多武峯の草創は事新しく説く迄もなく、祭神大織冠鎌足公の長子定慧和尚の建立せる妙樂寺、後年大織冠の靈像を安置せる聖靈院にある。爾來藤原氏の繁榮と共に寺勢興隆し、廣大なる寺領、多數の神人はその靈像の希異と相俟つて、南都北嶺につき廷臣の一大威嚇となつた。其勢力の溢るゝ所幾度か兵火の厄に遭ひながら夥しき刀槍と共に尙二千五百通の文書を藏有してゐる。

彼の由緒と勢力とを有せる談山神社の文書が政治に、經濟に或は朝廷武家の交渉に深き關係を持つ事は想像に難くない。

前宮司吉井良地氏は本神社に奉仕してより什寶を整理し、如此資料を空しく秘藏するを惜しみ、嚮に春日神社文書を編修刊行して學界に大なる貢獻せられたる本學中